

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3290100266		
法人名	株式会社 ひょうま		
事業所名	グループホーム ひなたぼっこ・えびすヶ丘		
所在地	島根県益田市下本郷町705番地29		
自己評価作成日	2021年 9月 21日	評価結果市町村受理日	令和3年12月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	
所在地	島根県松江市上乃木7丁目9番16号
訪問調査日	令和3年10月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・今までの生活習慣や性格を大切に、できる力を発揮しながら、利用者の方が自分のペースでその人らしく暮らす事ができるよう努めている ・入居者の方の状態変化・重度化に伴う苦痛や不安等への細やかな対応を行い、主治医や家族の方と連携を取りながら住み慣れたホームで安心して暮らし続けることができるよう努めている ・コロナウイルスの影響で制限されることも多い中、感染防止に努めながら、地域や家族の方との繋がりを維持し、又楽しみへの支援は工夫と実践を継続し、心豊かに暮らすことができるよう努めている。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>高台の住宅地の中にあり、交通量は限られ騒音等は少なく静かで、海、山、川からも遠く自然災害には合にくい環境にある。以前から地域との交流が盛んで運営推進会議やボランティア等での関わりの強い地域であったが、コロナで多くのことが中止になり、今は玄関先でのわずかな行き来で関わりを続けている。精神面の刺激が限られる中、職員の得意を生かして多くの行事を行っており、コロナ禍でも楽しめるように考えられている。管理者は職員のレベルアップを求める声に対し、施設内研修の内容を工夫し多くの勉強会を行っている。今年度は高校卒の職員を雇用しており、レベルに合わせて時間をかけて職員教育を行う意向もある。平均介護度も3以上と重度者も多く、現在1名の看取りの方に対応している。自然な流れとして看取れるように研修を重ね職員間での意識統一のもと取り組んでいる。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人らしく今までの生活に近い環境を作り出す等を盛り込み、普段の暮らしに活かせるよう、月1回職員会議でケアを振り返り、足りないところは検討し全職員が同じ認識でケアが提供できるように努めている。	今年度高卒の職員を採用。経験がない為まずは、初歩的な事を伝え職場の雰囲気になれることから始め、業務に入り認知症の理解に繋げるようにしている。段階を踏みながら理念について話していくこととしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今までは地域行事の参加も積極的に行い、地域の方との交流を深めていたが、コロナ禍で地域行事も中止となっている。又地域の方との接触も控えている状況であるが、近所の方も気にかけ「くださり、花や野菜をいただいたり」と繋がりも継続している。	地域の活動の大半が中止となり関わりはかなり減っているが、清掃活動のみ職員が参加している。地域からは野菜や花やお菓子など届けてもらう関係は続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナウイルスの影響で積極的な地域貢献はできていないが、コロナ禍での認知症の方の過ごし方や感染予防の取り組み等を運営推進会議で報告している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催していたが、コロナ禍で文書開催となる事もあった。ホームの状況を文書で報告した後に連絡を取り、意見を確認した。開催時は今まで通り地域の情報を確認したり、ホームの取り組みへの意見を聞き、日々のケアや運営に活かしている。	自治会長、副自治会長、組長、居宅のケアマネ、市の担当課など今まで参加のあった方に事前に状況報告を行い意見をj得る形でホームで開催することが多かった。会議後にはまとめを送り理解を得るようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に出席してもらい、ホームの状況やケアの取り組み等を伝えたりしながら連携を深めている。又日々のケアで困っている事を相談し、解決に向けての相談窓口を紹介してもらったり、コロナ禍で困っている事を報告し、アドバイスや支援協力を得ている。	運営推進会議には参加があり、専門的な助言を得たり情報提供を受けている。同じ方が担当で、こちらの状況をよく理解しておられるため、心強い存在でいい関係が築けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1回身体拘束適正化委員会を開催し、全職員で普段のケアを振り返りながら身体拘束に繋がる行為がないか確認している。又勉強会を行い、正しい理解と防止に努めている。玄関の施錠はしているが、日常的に外に出る等開放的な雰囲気作りを行っている。	定期的に委員会を行い勉強会を実施している。虐待を含めて半年に1回自己チェックもj行い身体拘束のないケアを実践している。職員のストレスチェックの必要性を感じ独自の評価も取り入れている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	コロナ禍で外部研修はリモートで行い、内部研修も実施した。又年2回虐待防止自己チェックを全職員実施し、問題となる状況については職員会議でケアの振り返りや業務・職員人数等の検討・改善を行い働きやすい環境の整備に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在成年後見制度利用者はおられないが、研修会等の参加を行い、知識を深めていくよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間をかけて、すべての書類に具体例を示しながら説明をし、理解、同意をいただいている。改定等あればその都度説明し同意をいただいている。また解約時には不安や疑問を残さないように相談の機会を持ちながら行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の日々の言動の中から思いを察するよう努めている。又年1回、家族アンケートを実施し意見・要望等を確認したり、コロナ渦で面会等ができないことから、電話やお便りでホームの様子を伝え、要望や意見を確認するようにしている。	年1回の家族会はコロナで中止になっているが、家族アンケートを実施し業務改善につなげている。状況報告は細目にするようにし、月1回様子を伝える便りも写真入りで作成し本社からも季刊誌を合わせて送っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日のミーティング時や毎月の職員会議で意見交換をし、情報の共有や要望を聞いている。職員が意見が言いやすい雰囲気作りにも努めている。また内容によっては、ホーム長会議で上司に意見・要望を伝え、現場の意見を汲み速い対応に努めている。	年に2回自己評価の際、個人面談をするようになっているが時間が取れずできていない。評価の際には管理者に対する評価も求めており反映するようにしている。コロナもありストレスチェックも加えており、今後に生かすためにも面談の必要性を感じている。	職員個々に意見を聞く時間を作ることで、ストレスの軽減に繋げたり意見が反映するよう努めていただきたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の資格取得に向けた支援を行っている。また職場の悩みや疲労等に対し、職員の状況をみて相談ののったり、有給消化の取得等働きやすい環境づくりに努めている。又各職員が得意分野を活かした仕事ができるような環境を提供しやりがいに繋げている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人全体で研修会を開催していたが、コロナ禍で中止となり、代わってホーム内で勉強会を開催している。コロナ禍で外部研修等の参加は難しいが、職員同士で得意分野の知識・技術の共有や指導を行い、現場で実践指導することで日々トレーニングできている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で交流ができていないが、普段はホーム長は近隣のグループホームの集いに毎月参加し情報入手し参考にしている。また他法人とのグループホーム職員交流会が催され参加する事で、日々のケアにつながる情報交換ができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に面談をし本人の状態を家族やケアマネ・サービス事業所の職員から聞き、より多くの情報を得た上で少しずつ受け入れてもらえるような関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の希望により面談場所を決めている(自宅・ホーム)。今までの家族の苦労やサービスの利用状況等を把握し、事業所としてはどのような対応ができるか、事前に話し合い納得した上で次の段階に繋げるよう丁寧に対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前には体験入居を行い、その時に入居の見極めを行っており、徐々に馴染んでもらえるような工夫をしている。体験入居で入居が難しい場合は、家族・ケアマネ等と今後の必要な支援等を検討し、本人・家族の不安を最小限にするよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	普段の生活の中で役割や楽しみが持てる場面を多く持ち、職員も共に楽しみ、共に暮らす関係づくりに努めている。その中で職員に利用者から生活の知恵や技等を教えてもらえる場面がある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で面会制限せざるを得ない状況もあるが、リモート面会やドア越し面会を行い、家族の方との関わりが継続できるよう対応している。又ホームでの暮らし方をお便りでできるだけ詳細に伝え、電話で家族の方の思いを確認し共有しながら対応している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で外出が制限される中で、今までのような馴染みの関係性を継続していく事は難しいが、ホーム内で関係性を深めたり、人込みを避けた場所への外出をできるだけ行い、又自宅近くへ出かけた等工夫しながら支援している。	地域の大きなお祭りや敬老会のシーズンになると出かけたかったと声が聞かれた。空き家になった自宅を心配したり、墓参りに行きたいなど、コロナ禍でもできる範囲で外出の機会を作っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の性格を把握し、気の合う方同士で楽しく過ごせるような場所や場面作りをしたり、職員が調整役となり利用者同士の会話が出来るような支援をしている。性格や生活習慣の違いからトラブルに繋がる事もあるが、職員が仲介役となり、関係性への配慮を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	転居(施設・入院)の際は、支援の内容・注意が必要な点について情報提供し、きめ細かな連携に心がけている。又、退居後も相談に応じる事を家族の方に伝えている。看取りを行った後は、落ち着いた頃に手紙と共にアンケートを送付し、思いを確認している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族の方から情報を得たり、日々の生活の関わりの中から気持ちや希望等を聞いたり、察したりしながら支援している。日々の新しい発見については毎日のミーティング時で話し合い情報を共有している。	日々の動きや言葉の中から気持ちを考えミーティングや会議の場で集約している。楽しいことは思いが出やすいが、嫌なことは顔を見ながら、色々な思いがどこから出るのか、言葉にできないことを見つけるようにして計画に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に家族の方や、ケアマネの方により全般的な情報を聞いている。また入居されてからはコロナ禍にて、主に電話で家族の方と情報交換を行いながら詳しく把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の状態や状況を理解し、職員は毎日の申し送りを通じて意見を出し合いながら把握し共有する事で細かい支援につなげている。できる事への見極めをしながら支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態をより多くの職員でアセスメントし、本人の思いや望む暮らしを軸にし、家族の方からも意見や要望を聞きながら、その人らしく暮らし続けることができるよう具体的な内容を盛り込んだ個別計画を作成している。	モニタリングを月1回実施。会議ではカンファレンスを行い計画に反映できるようにしている。集合して担当者会議ができないので事前に電話等で意見を聞き職員間で担当者会議を行い計画作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプランに沿った記録に心がけ、職員の気づきや利用者の状態変化、日々の暮らしの様子や本人の言葉、エピソード等個々のケア記録に記載している。実践した結果や記載した記録は介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状態や家族の意向に配慮しながら、柔軟な対応を行っている。主治医の自由な選択や通院や送迎等必要な支援は柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議、避難訓練等では消防・地域の方(自治会長・副会長・組長等)の協力体制はできている。ふれあい会館や近隣の公民館で行われる地域活動はコロナウィルスの影響で中止されているが、今まで築いてきた関係性は維持されている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望があれば主治医の変更はせず、受診・往診が続けられるようにしている。協力医に変更される場合は支障がないよう協力医と連携し安心して医療が受けられるよう努めている。又受診・往診の結果は家族に報告し職員間でも情報共有している。	往診可能ならかかりつけ医を変更することはなく、ここから協力医を紹介することもできる。現在4名のドクターの往診をうけている。看取りの方が1名あるが、看取りに対しても協力的で、夜間緊急時の対応も可能になっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師を配置しており利用者の健康管理や状態変化時の相談や指示・対応を行っている。介護職と連携し、些細な変化等も職員全体で共有しながら、必要時は適切な対応・受診ができるような体制にしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医師会病院との懇談が毎年1回あり、その場で双方の状況について話し合い協力体制ができているが、コロナウィルスの影響で一時中止となっている。入院時は医療機関と小まめに情報交換を行い、早期退院に向けスムーズに受け入れができるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態変化時には、家族、主治医、ホーム側と話し合いの場を持ち、方向性を決めるようにしている。終末期を支える場合は利用者の変化に応じ、医師・看護師・職員が連携をとり、納得した最期を迎えられるように、随時家族等より意思を確認しながら取り組んでいる。	現在も看取りの方が1名ある。入居期間も長く1人の人と最後まで関わることとし自然な形と考えている。職員の中には看取り対応に精神的負担を感じる人もあり、勉強会をして取り組んでいる。かかりつけ医の協力もあるが、今後は訪問看護の利用も考えて行く意向。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は2年に一度救急救命講習を受講し、救急時の対応ができるようにしている。又職員会議で夜間時の緊急対応、特別疾患をもった利用者への対応等のミニ勉強会を行い、いざという時に対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回火災時の避難訓練を実施し、消防署・地域の方も参加し消火器・避難方法等指導を得ている。運営推進会議では地域の方より、自然災害時どのように動くかアドバイスを受け、いざという時の協力体制を築いている。風水害の避難訓練を年1回実施し非常時に備えている。	年2回の訓練を行っているが、コロナで消防署の指導は受けられなかったが、アルソックの指導で実施。自然災害を受けにくい場所ではあるが、夜勤体制も1名なので、職員間で早めの判断で対応することとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年2回自己チェック表で自己を振り返ったり、職員会議で職員の言動を振り返り、全体で見直しを行ったり、業務を見直す事でゆとりを持って対応できるよう努めている。日々の暮らしの中で、年長者として敬意を払いながら対応するよう努めている。	自己評価で振り返りをしながら接遇面の勉強会もしている。方言の使い方やことばじりの強さなど、気づかずに使っていることもあり、会議の場で見直すようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	全てのことへの意思表示は難しいため、できることからなるべく自己決定できる場面を作る努力はしている。日々の生活の中で希望や思い、嗜好など見極めるように努力している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個々の性格や今までの生活習慣、できることや楽しみを把握して個別支援に繋げ、自分のペースで暮らすことができている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分でできる方は行ってもらい、難しい方には、その方の好みを踏まえ対応したり、希望を聞きながら支援している。訪問カットを利用し、希望を伝えながらカットしてもらいおしゃれが保てるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ホームの畑で野菜を育て収穫したり、近所の方にいただいた野菜と一緒に調理し、新鮮な野菜を活かし食べる楽しみに繋げている。好物を聞いたり、一緒に調理・盛り付けを行ったり、色どりや味付け等を工夫し、美味しく食事を楽しむ事ができるようにしている。	調理好きだったが、集中力が続かず長続きしないこともあり、皮むきや切ったり盛り付けたりなど、手伝えることをしてもらっている。食材の買い出しにも出かけていたが今は職員が行っている。同じ物を一緒に食べている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々に合った食事量・食事形態を確認し、状態に応じ柔軟に変更している。食事が摂りづらくなってきた方にも、工夫して提供している。水分は個々の量を確認するとともに、飲みやすい物やゼリー等を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、自分でできる方には声かけを行っている。自分でできない方は義歯洗浄の介助を行い清潔が保てるようにしている。歯科医や歯科衛生士の方に定期的に個々に合った適切なケア指導を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄パターンや習慣を把握しトイレ誘導を行い、トイレでの排泄を促す支援をしている。夜間はポータブルトイレを設置したり、介助が必要な方はセンサーを使用し、安全に排泄ができるよう対応している。其々の方に添ってできるだけトイレでの排泄に心がけている。	重度な方はオムツを使用したり、紙パンツだったり、失敗があっても自分でトイレに行きたい方もあり、必要な支援をするようにしている。コスト面にも配慮しパットも尿量に合わせて使い分けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い食材、献立の工夫を心がけたり、水分補給の重要性や身体を動かすことの大切さを意識し対応している。起床時には飲み物の提供をしスムーズな排便を促すようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	頻度や時間帯への個々の希望に応じた支援は難しい面もあるが、入浴時は1人1人ゆっくり対応している。重度化した方、負担が強い方には清拭に変更し楽な方法で支援している。	3日に1回午後入浴を基本としているが、予定に合わせて時間を変更している。大き目の家庭浴槽のため中に入れない場合はシャワー浴だったり重度の方は清拭で対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ドライブや散歩・日光浴等を取り入れたり、日中の活動を促し一日の生活リズムを整え、利用者のペースで午睡や就寝ができるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方箋を個人ごとにファイルに整理し、内容を把握できるようにしている。服薬時は本人に手渡し服用の確認をしている。処方の変更時は状態変化の観察に努めている。錠剤が飲みにくい方や拒否がある方には、飲みやすいよう粉末に変更したり等柔軟に対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人・家族からできることや楽しみ等の情報を入手し得意分野の野菜作り・家事作業等で知恵や経験を発揮できる場を提供している。又楽しみ方の支援として生け花教室・運動・季節行事等を行い、コロナ禍で支援が減らないよう、特に工夫し対応している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で買い物や地域行事への参加は中止しているが、人込みを避けての外出やドライブはできるだけ行い、外出支援の継続に努めている。又玄関先に出て日光浴を行ったり、近所を散歩したりし外気に触れ季節を感じるようにしている。	コロナで外出の機会は減っているが、平坦な所を選んで散歩したり、ドライブに行っている。裏のベランダや玄関前で日光浴やお茶をして外気に触れる機会をつくるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小人数ではあるが、小遣い程度のお金を所持し、必要な時に使う事ができるようにしている。コロナ禍で買い物に出かけられず、機会は減っているが、神社に参拝した際、賽銭を自分で準備し使用される等、その方の思いや力に応じた対応に努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナウイルスの影響で面会が制限される中で、今まで以上に電話や手紙等の支援を行い、家族との繋がりや思いを伝える事ができるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関・テーブル・洗面台・居室には季節の花が飾られ、会話の展開につながっている。居間は皆さんが自然に集まりゆったりと過ごす事ができるようなソファの配置を工夫したり、必要以上の装飾品を置いたりせず、シンプルで程よく落ち着ける空間作りに努めている。	住宅地の中にあるため車の騒音はほとんどなく静か。2F建てで玄関から入ったホールは天井が高く明るく開放感がある。ホールからベランダに出ることができ、裏の畑には季節ごとに野菜が植えられている。外の景色はあまりよく見えないが、施設内のあちこちにきれいな花が飾られて季節感がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関先に椅子を設置し、利用者同士でくつろげるスペースがある。又、1人1人落ち着ける場所があり、気の合った方同士でソファに座って寛いだり、独りで過ごす事を好まれる方の寛げる場所があったりと其々の方の心地良い場所の提供に努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの家具や寝具等使い慣れた物を持参してもらっている。又思いのある物や家族の写真を置き、自室が心地よい場所となるようにしている。一方で家にあつた物があると返って混乱に繋がる人もあり、状態に応じ個別に対応を変えている。	クローゼットがあり収納できるためあまり大きな物は持ち込まれていないが、テレビやタンス、衣装ケースなどが置かれている。家族からの花や写真も飾られているが、物があることで落ち着かない場合もあり個々に合わせた部屋づくりをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全衛生推進者を置き、定期的にホーム内・外の点検を行い、不便な場所や危険箇所はすぐに改善している。できる事やわかることを活かした環境への配慮も行っている。		